

王安石

十一世紀の前半の詩の、あるいは文明全体の、指導者であった欧陽修は、当然のこととして、自らの築いた新しい文明の体制を、次の時代において主宰すべき後継者を求めた。そうして二人の秀才に、望みをかけた。一人は王安石であり、一人は蘇軾である。

二人は、果して次の半世紀、すなわち十一世紀後半の、詩の、また政治を含めての文明の、指導者となり、主宰者となった。ただし二人の道は同じでない。王安石は欧陽修に反撥し、蘇軾は欧陽修を祖述して、ともに欧陽修以上の詩人となった。ことに蘇軾は北宋最大の詩人である。しかし王安石もまた北宋詩の大家である。

王安石、字は介甫、号は半山、爵位は荊公、おくりなは文公は、その革新的な政策によって、今世紀の歴史家から、偉大な政治家として評価されている。しかしごく近い過去までの評価は、むしろそうでなかった。あまりにも革新的な政策のゆえに、矯激な非常識な政治家とするのが、彼のすぐ次の時代である十二世紀南宋以来、今世紀初、清朝末年までの中国の、またその影響の下にあった日本の儒学の、常識であった。にも拘らず、政治家としての毀誉褒貶をこえて詩人としての名声がゆるぎないことも、やはり南宋以来のことである。彼の全集「臨川先生文集」のうち、三十七巻は詩であり、古詩約四百、律詩絶句約千を収める。

王安石は 仁宗の治世のはじまる前年、一〇二一に生まれ、その治世二十一年目である慶曆二年、一〇四二、二十二歳、八百三十九人中の四位という好成绩で 進士となっている。当時すでに大官であった欧陽修は、年齢では十四、進士としては十二年後輩であるこの同郷の秀才に目をつけ、中央のよい地位につけるべく、同僚の大官たちと、いろいろ骨おっている。しかし王安石の方では、むしろ冷淡な態度を取りつづけ、欧陽修らが政権の座にいた仁宗の治世を終るまで、自ら求めて、しばしば地方官となっている。

「民を治むること豈に吾れ能くせんや、閑僻にして庶くは偷ある可し」。

しかし彼には別の気持もあったと、観察される。欧陽修たち先輩は、儒家の優位を恢復し、新しい文明の体制を整えたことを誇っている。しかしいっこうに実践的でない。古代の儒家が理想とした堯舜の世、ないしは夏、殷、周の三代の世、そこでは人民の幸福を第一とする政治が行われたはずである。先輩たちはその再現に努力しようとする意欲に乏しい。そうした疑問と嫌悪は、地方官としての勤務のうちに得た人民との接触によって、いっそう深まったであろう。以下省略